

シネマズライフ

2019年9月7日発行 第169号

http://p.booklog.jp/users/rion-takagi

たかぎ りおん
貴樹 諒音

【最近のこれはお見事!】

『虚空門 GATE』 UFOのお話で普通の映画かと思いきや、ドキュメンタリーらしいが...

【最近のこれはまずいぞ!】

『帰ってきたムソリーニ』『帰ってきたヒトラー』のイタリア版でコメディらしいが『帰ってきたヒトラー』はコメディじゃないぞ!

映画の風景 日本の風景

※ 広島・相生通り(原爆スラム) ※



— 1974年基町再開発事業途中の原爆スラム周辺。

昭和33年、広島。原爆の被災者達が住む「原爆スラム」に皆実(みなみ)と母・フジミは住んでいた。弟の旭(あさひ)は親戚の家に疎開していたので被爆から逃れていたが、妹・翠は被災後亡くなっていた。皆実は健康で同じ会社に勤める打越は明るく皆実を魅かれており、皆実はそれに答えようとするがある事からそれはできなくなっていた。しかし、しばらくして皆実にも原爆症の兆候があらわれ、そして49年後の平成19年、東京に住む石川七波は最近父の旭の様子がおかしく少々心配していた。ある夏の日、また旭は夜中に家を抜け出し、七波は密かに後をつける。駅に行き着く馬行きの夜行バスに乗ろうとする旭に七波はあきらめようとするが、偶然訪ねたみの利根東子(とろこ)と再会する。東子は引き返そうとする七波を強引に夜行バスに一緒にのり送る事を決める。

旭は広島、多くの人々に会話をし込んだり、探している様子を見て、七波は訝(いぶか)しく思うが、皆実のお墓に祈る旭を見て、過去の祖母の死・母の死を思い出す。

戦後、広島の本川沿いに、原爆被災者や疎開から帰った者、引揚者などが焼け残ったトタン板などを使ってバラック小屋を建て昭和35年頃には90戸ほど密集していたという。今本川沿いは木々が植えられる公園のようになっている。

原爆投下の為に一生を狂わされた人々の物語だが、最後に若者達が明るく生きる姿は実に清々しい。

『夕風の街後の園』2007年日本 監督 脚本:佐々部清 脚本:国井桂 原作:こうの史代
出演:田中麗奈 藤生久美子 藤村志保 新正章 古沢悠 田山涼成 栗田麗 中越典子 伊崎充則 金井勇太

街実が亡くなる前に呟く言葉は多くの意味が込められており、ぜひ海外で公開してほしい。この映画の公開は見るものに日本人のメッセージを伝える事ができると思う。



↑『市民ケーン』のオーソン・ウェルズ

さて、もう一本、一人の男の人生を扱った映画も公開された『ゲティ家の身代金』。世界的な大富豪・ジャン・ポール・ゲティ。アメリカの石油王でありながら、孫のジャン・ポール・ゲティ三世が誘拐されても、『ケチ道』まっしぐらの彼は、「もし、身代金を出したら、他の孫達にも身の危険が及ぶ」という「言い訳」を発売し、最後は身代金を出さずものの、粘りに粘りなんと身代金を値切ったのだから恐れ入る。他の富豪達とは違い、ジャン・ポール・ゲティは政治にはほとんど興味を持たず『ケチ道』に勤しんでおり、金を持って大概政治に関わりたい人が多い中、これはこれで珍しいと言える。

コラム
幸せって何? と思っ件
中編

結局、晩年はさすがに人恋しくなったのか、邪険にしていた子供達を何かあると呼び寄せすこしているが、はたして富豪でなかったらどうだったのだろうとは思うが。

新聞王・ハーストをモデルにした『市民ケーン』の映画の主人公は不幸そうだったが、ハーストは作った作家の思惑とは別にそう不幸でもなく(笑)、最後には、家族・愛人に囲まれ充実した晩年を過ごした。逆にハーストをおちよくりまくった監督のオーソン・ウェルズは、偏屈な性格が災いし映画作家としていい一生を送った訳でもなかったところが面白い。

また、往年の映画スター! パスター・キートンも、人気が無くなっていったが、これまた人が思うほど不幸ではなかった。



以下次号

